



長編『兼ちゃん。』
小説

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

(一一) おみやげ。

原田の老人は双の握りこぶしを背中にまはして、愉快さうに眼に笑を浮べて、

左か右か 當てたら やらうナ

右か左か 當てたら やらうナ

といふと

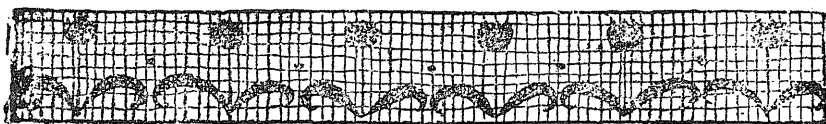
「右！」と兼ちゃんが答へた。

原田のお祖父さんは言はれた方の手を擴げて薄紙に包んであるお菓子を一つ見せ、

「お前は賢いな」と笑ひながら「きつと菓子のある方を當てるから」と言つた。

「あたい、えらいよ。」と兼公は謙遜しておいて、さつさとお菓子を食へ出した。

老人はまた高聲で笑つて、左の手に隠してあつた、お菓子をそツとポケットに戻した。



「あたゐ、いつでも當てるネ。」と兼公は尋ねた。

「いつでも當てるな！ どうしてそう當るんだかお祖父ちゃん感心してしまふ。」

「たゞ當るんだよ……これおいしいな。」

「そうか。」

「あゝ。一口食べさせたげやう。」

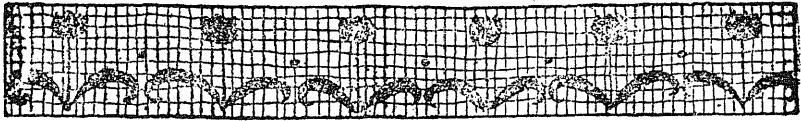
「いやもう澤山だ。」とお祖さんは嬉しさうな顔をして「祖父ちゃんは一服するとしよう。」

坊や、祖父ちゃんにお菓子貰つたと母ちゃんに話すんぢやないよ。夕食が食べられないやうになるといけないからな。」

「あたゐ話しやしないよ。」と兼公は氣を揉んでゐる祖父を安心させやうとするやうに請合つた。

此二人は退潮を見計らつて岩磯の濱へやつて來たので、老人は岩の上に腰を下し孫は石や海草の間をほじくつて小蟹を探してゐるのだつた。もう五六疋は捕へて古いデコボコの空罐に入れてあつた。

「坊や、足を濡らすといけないよ。」と祖父は使ひこなしたパイプに工合よく火を點じてから注意した。



「大丈夫だよ。」と兼公は保證した。實は彼の足はもうその時靴の中でビチャ／＼になつてゐたのだつたが「やア、こゝにも居らア。」と小蟹をつまみ上げて手のひらに這はせながら「あ、くすぐツたい、まだちいさくツて剪めなインだね。お祖父ちやん手に載せて見たいかい。」

「あ、みたいよ」と老人は孫のお機嫌をとる氣で「あ、ほんとにくすぐツたいね。お前そんなに蟹を取つてどうするつもりなんだ。」と罐の中を指して尋ねた。

「家へもつて歸るの。」

「松濱へかい」

「あ、松濱へ。」

「みんな死んでしまふぞ。」

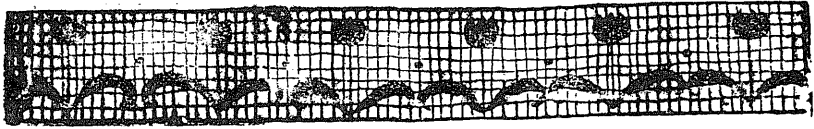
「どうして。」

「蟹は松濱では生きてゐない。」

「どうして生きてないの。」

「鹹水でなくツちや。」

「ぢや鹹水も持つていく。瓶びんに入れてもつてけばいい。」



老人は頭を振つてゐるので、子供は失望した顔をした。

「松濱へ蟹をもつていつてどうするんだ。」

「どうもしない。」

「そいぢや何故もつてゆくのだ。」

「あたいのにするんぢやないよ。あたひ蟹なんかいらぬ。蟹が大きくなつて床中へ這つて來ると怖いもの。清ちやんが蟹欲しがるんだよ。」

「清ちやんて誰だ。」

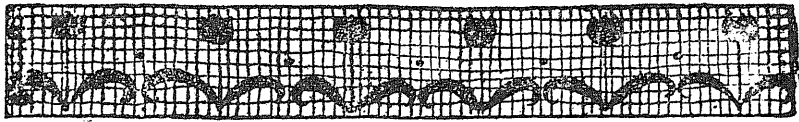
「ちいさい子だよ。あたひよかもつと小さくつて寝てるんだよ。お父ちやんは死んぢやつて母ちやんが洗濯してるの。」

「うんそうか。それでその清ちやんが蟹を取つて來てくれつていつたのか。」

「始め猿が欲しいツていつたんだよ。岩礫に猿がゐるね岩に登つたり棧橋だの濱だのをかけ廻つてるかと思つてたんだ。清ちやんは海を見た事がないから。」

「そいつは可哀さうだな。猿なんか居ないツてお前話したのか。」

「あゝ。そうしたら泣き出しちやつたの。それからあたひ蟹が居るツていつたら、すこし取つて來てくれつていつた。それで……それで……あたひ松濱でも蟹は生きると思つた



「もんで……いゝや……皆ぶちまけて石でたゝいてやらう。」

「およし、そんな事するもんぢやない。」とお祖父さんはあわてゝ制して「松濱で生きてゐられないのは蟹のせいぢやないから。」

「たゝきつぶしてやる。」と兼公はきほひ立つていふ。

「およし、およし。お前がもし蟹だつたらそして大きな子供がやつて来てお前を石でたゝきつぶしたらどうする。」

「あたいが蟹なら松濱で生きてる。」と言ひながら、兼公の眼はやつぱり手頃の石を探してゐた。

原田の老人はパイプを岩の上に罪いて、起ち上り、

「清ちゃん蟹をつぶされてよろこぶかい。」

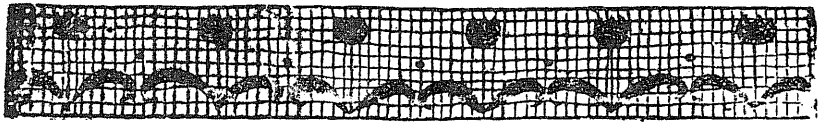
「あゝ、よろこぶよ。」

「そうぢやあるまい。蟹はお前、何もわるい事もしないのに。」

兼公はちいさい石塊を拾ひ上げて、

「蟹は人間が海に入つてゐるとき足の指を剪むよ。」

「だけど、こんな小さい奴はしないよ。」



「ちいさな奴だつてちき大きくなる。」と兼公は澄してゐる。「こいつから先へつぷしてやらうと罐の中から一疋選び出して岩の上に載せた。」

「老人は、兼公のふり上げた手を掴んで、静に

「兼坊、そんな事をするもんぢやない。」

「どうして。」

「どうしてツてね。」と老人はこの亂暴ものになるほど、思はせるやうな理屈はないかと思案しながら「これこんなに小さいから。」

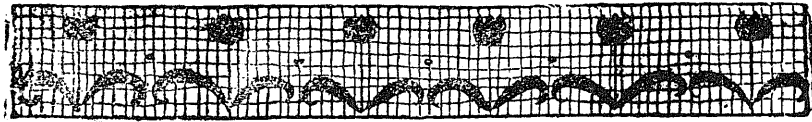
「ほんとに小さい奴だ。」と兼公も同意した。そしてこの子が罐を覗いてゐるうちに今の小蟹は岩を這つて逃げてしまつた。「こゝに大きいのが居る、こいつを、たたきつぶさう。」

祖父はおごそかに、

「兼坊、御前むごい事をしてはならない。大きな巨人おほをとこがお前をつかまいて太い棒でぶち殺さうとしたらいやだらう。」

「巨人なんて嘘だよ。巨人なんて居ないんだよ。」

「何でもいゝから、むごい事はするもんぢやない。」と老人も始末に困つて「蟹を逃がして



おやり、お祖父ちゃんをそう困らせないで。ごらん、蟹はこんなに嬉しきうにしてゐるだらう。それを叩きつぶしたりするのは悪い事だ。そら濱の市の時に子供が多勢走りまはつて遊ぶだらう。この蟹はあの子供達みたようなものだから、お前が叩きつぶしたりしなければありがたがるよ。」

老人の言つた事がどこか子供に感じた見え、兼公は石を棄て、
「ちや叩きつぶすのよさう。」といつた。

「良い子だな。」

「逃がしてやる。」といつて兼公は罐を逆様さかさまにした。

祖父は孫の頬を撫で、

「お前はむごい事はしないな。さ、も一つお菓子を上げやう。」

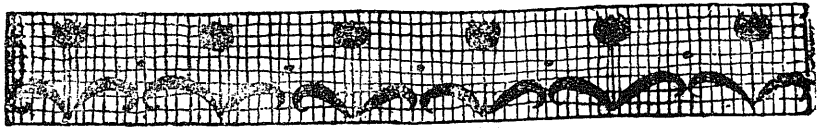
「お祖父ちゃん、ありがたう。」

「もう蟹をつぶすまいな。」

「あゝ。だけど清ちやんがつまんないだらうな。」

「そうさな。何か清ちやんにやるものを考へなくつちや。何がよからうな。」

「何か生きてるものがいゝんだ。」



「生きてるもの。そいつア因るな。」と老人は再び腰をかけてパイプを口に、水の上を眺めやつて「お祖父ちゃんおぢやんは飼鳥かひどりをしてゐる人を知つてるが、清ちゃんきよちゃんは小鳥好きかい。どうだね。」

「好きでない。」と兼ちゃんかねちゃんはきつぱりと立ちどころに答へた。

「からだが悪くて寝てゐる子供にア、小鳥がいゝんだがな。ビョ〜鳴いてきかせてな。」

「小鳥はぢき死んぢまふよ。床ン中に入れて遊べないや。」

「それもそうだな……小猫はどうだ。荒物屋のおかみさんとこに猫の子が今居るよ。」

「清ちゃんきよちゃんにも小さな猫が居たんだよ。そうしたら、それが清ちゃんきよちゃんの鼻引搔いたもンで、清ちゃんきよちゃんの小母さんが追出しちやつたの。それから白い南京鼠も居たんだよ。鼠の子供も居たンだけれど小母さんが清ちゃんきよちゃんの床ン中に入れてさせなかつたつけ。」

「それぢや、どうも、お祖父ちゃんおぢやんも、何ともしやうがない。」

「蟹が一番いゝんだがな、生きてさへすれば。蟹を箱ン中に飼つておいて、清ちゃんきよちゃんとあたいとで毛布の上で競走させるンだつていつたんだよ。でも毛に足が引からまるかもしれないね。」

「そうだらう……どうも清ちゃんきよちゃんにやる生きてるものツてのは無さうだな。」

兼ちやんが詰らなさうな顔をするので、お祖父さんも困つて溜息をついてパイプを取落としてしまつた。

「なア、兼坊、寝てゐる子供にやるようなものはたんとないね。清ちやんはその内に全快なるのかい。」

「うゝん。背中がわるシだよ。時々大變痛いシだツてあたい清ちやんになりたくない。」

「それア可哀さうだな。かうしたらどうだらう。」

「お祖父ちやん、なに。」

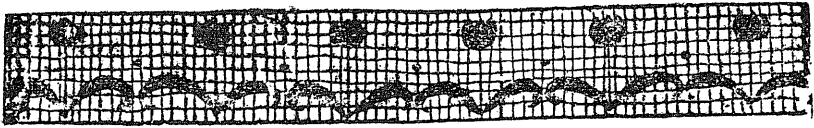
「夕食に家へ歸るときに、店を見て歩いたらあの清ちやんの悦びさうなものがみつかるかも知れない。」

「今ゆくの。」と元氣づいて兼公がさけぶ。

原田の老人は大きな銀時計を出して見た。

「あゝ、もう行つて、何があるか見よう。坊や手をお出し……オイ、コラ！ お祖父ちやんに驅けさせるなよ。お祖父ちゃんはお前みたやうに身が輕かないよ。よく足元を氣を付けて。二人でこのツル／＼途で轉んでしまふは。」

幸ひ何事もなく街起へ出てやがて店のある處へ來た……老人は呼吸をはずませ、兼公は



希望に輝いて。

玩具が一杯並んでゐる店の窓の前で二人は立ち停つて眺めた。

「さア」と老人は財布を出して「拾銭玉一つやる。何でも好きなものお買ひ。」

「ありがたう。何買はう。」

「あの繪のかいてあるミルク注ぎ、あれはどうだ。」

「あれ、だめ。」

「清ちゃんに丁度いゝおみやげだがな、『岩礫^{いはいそ}みやげ』とかいてある。あれでミルク飲むのいゝぢやないか。」

「いけない。」

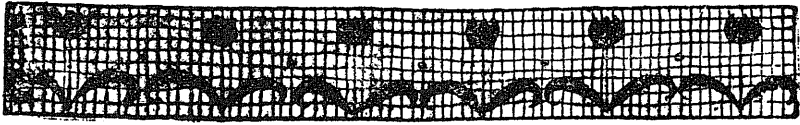
「ぢやお前の好きなやうにおし。繪具がある。清ちゃんは繪をかくの好きかい。」

「うゝん。あたい好き……あたい大きくなるの繪かくの。ペンキ壺下げてバラの塊もつて。」

「ぢや、清ちゃんも……」

「うゝん。」

「あすこに、綺麗な繪本がある。あれはどう……」



「いけない。」

老人は匙を投げてしまった。

「あたいの喇叭買はう。」とやつと兼公がいつた。

「清ちやんは寝てゐるンぢや喇叭を吹くの都合がわるからう。」

「あたいが代つて吹いてやればいい。あたひ大きく吹けるよ。」

「そうかい。だくと、清ちやんはそれやいやかも知れない。」

「どうして。」

老人がそのわけをいつて聞かせようとす途端に兼ちやんが喜びの聲をあげて。

「あら、あれごらん！ あの隅ンとこに猿がぶらさがつてらア！」

「さアさ、お買ひく、大急ぎで。」と老人も笑つた。

兼公はせき立てられるまでもなく早速買ひ取つて、それを祖父に見せびらかした。泥細工の猿がゴム絲の端でピン／＼跳ねてゐる玩具だつた。

「ね、生きてるようだね……ね、そら跳んでらア。」といつて兼公は家へ歸りつくまでおもちやにしてゐた。

「清ちやんはきつと喜ぶよ。可笑しがらだらうな。」と老人はいつた。

「あゝ。」と子供はたいして氣乗りがしない返事をした。……清ちやんの事はどうやら一寸忘れてゐたらしかつた。やがてかれは丁寧に猿の首へゴム糸を巻きつけて黙りこくツて歩いた。

「お前、それを清ちやんにやるんだらう。」と老人が顔をのぞきこむと、

「あゝ」と兼公はかすれ聲で答へた。

(一一) 了り

三つ喰へば葉三片や櫻餅

虚 子

花曇り雨降る由井の渚かな

虚 子